# 有島武郎全集

第六卷

# 有島武郎全集

第六卷

筑摩書房

有島武郎全集第六卷
昭和五十六年二月二十日　初版發行

著　者　有島武郎
發行者　布川角左衞門
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番號　一〇一—九一
電話　〇三(291)七六五一(營業)
〇三(294)六七一一(編集)
振替　東京六—四一二三

印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所

0393-70906-4604　Printed in Japan

# 有島武郎全集　第六巻

# 目次

紀行

旅する心……五

童話・詩

燕と王子……九五
眞夏の頃……一〇七
一房の葡萄……一二〇
碁石を呑だ八つちやん……一二八
溺れかけた兄妹……一三八
片輪者……一四八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

僕の帽子のお話……一五四
火事とポチ……一六二
瞳なき眼……一七五
短歌……一八三
俳句……一八六

譯詩
ホキットマン詩集　第一輯……一八九
ホキットマン詩集　第二輯……三一七
ホキットマン詩集　補遺……四五七

校異……四七三
解題……五四一

# 紀行・童話・詩

# 紀

# 行

# 旅する心

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

The untold want, by life and
land ne'er granted,
Now, Voyager, sail thou forth,
to seek and find.

——*Walt Whitman*——

半年に亙る歐羅巴の旅の
唯一無二の伴侶なりし
壬生馬に

# 挿畫目次


巻首　著者及伴侶（寫眞）
1　ネープルス海岸通（ペン畫）
2　ネープルス風俗（同）
3　ネープルスの貧民窟（同）
4　ネープルスの漁夫（同）
5　ソレント（同）
6　ポムペイ壁畫のスケッチ（同）
7　セレナータを唄ふ女（同）
8　ヴィラ・ディ・ガヴァリエリより聖ピートロ（同）
9　羅馬古城壁（同）
10　ヴィラ・ボルゲーゼ（水彩畫）
11　橄欖林（ペン畫）
12　カムパニア・ロマーナ（水彩畫）
13　ヴィヤ・アッピヤの夕暮（ペン畫）
14　聖フランシスコ寺（同）
15　聖ダミアノ寺（同）

○

旅裝をとゝのへるにつけて思ふことは心の旅だ。家を離れ、友と別れて人は旅行くやうに、心も何時かは一度、習慣を離れ、愛着と別れて獨り淋しい旅に上らねばならぬ。……死……。旅裝をとゝのへるにつけて思ふことは心の旅だ。

○

一九〇五年某月某日

山の如く群がり集まる紐育ホヾケン阜頭の見送り人の中に、私は私に對する一人の見送り人も見出さなかつた。私は少し淋しい、然し全くこだはることのない秋のやうな涼しい心で、見送る人々、見送られる人々が船と阜頭との間に描き出す心の渦紋を眺めやつてゐた。日も秋の初め。空も秋らしく晴れわたつた午後であつた。

船はプリンツセス・イリーネ。サロンから起る盛んなブラス・バンドの進行曲につれて、幾百かの旅心は徐ろに米國の土から離れて行つた。

やがて奏樂はやんだ。船客の笑ひも涙も各の胸の奥へと沈んで行つた。私は自分の船房に這入つて見た。そこに小卓の上に、船にあてゝ送られた葉書が二枚乘つてゐた。一枚はアーサーとその妹のフランセスから。一枚は神經衰弱の爲めに假りの宿としてゐたワシントン郊外の田舍家の人々から。

何んといふ孤獨な三年を米國で過してゐたものだらうと私はその時しみ〴〵と思ひ入つた。

かくばかりの孤獨を敢て忍んで來た私を誇りたい心もあつた。その反對の心もあつた。

私は暫らくぼんやりとして、寢臺に深く腰をおろしたまゝ動かずにゐた。

○

この朝亞米利加を出てから始めて陸の影を見た。それは葡萄牙に屬する小さな五つの島で、その名をファヤル・ピコ、サン・ヂョーヂ・グラチオーザ、テルセイラ、サン・ミグネル、サンタ・マリヤといふ。所謂アゾーレ群島だ。その美しい名の連なりが、私をして既にラテン民族の領域に近づいたことを思はせる。海拔六千尺といはれるピコの火山の頂きには、雲冠が靈の輪のやうに置かれてゐた。面積の最も廣いサン・ミグネル島の海沿ひには、白壁赤瓦の民家が、牧場に餌をあさる羊の群のやうにちらほら立ちならんで、山の斜面に石垣で築いた段畑には、雜穀の類と果樹とが綿密に栽培されてゐた。七日綠を見なかつた船客の眼は、どれほどこのなごやかな色を嗜み貪つたらう。

あすこに住んで一生を終る人もあるのだ。私はあの島を暫らく眼にとゞめた。その島の上にうごめく人の影も不注意には見落さなかつた。けれども私は二度とあの島の傍を過らないかも知れない。あの島に住む人と私自身の存在とは何んといふ遠い隔りだ。普段はたゞ事もなげに暮し過してはゐるけれども、ふとこんな境地に眼覺めると、生きるといふことが恐ろしくさへ考へられるではないか。私がこの地上に繫く因緣の微弱さを……而して自然の窮りなき豐滿と多樣とを……。心がひとりでに叫び出したくなるやうななつかしみを感じながら、言葉もかけず、挨拶もかはさず、たゞ一眼見合はしたばかりで、永遠に視界から離れ去つてしまふ人。その人は一體何の爲めに私の前に現はれ、何んの爲めに私から隱れてしまふのだらう。

夕方にはもう島々は見えなかつた。夜が暗らく來た。缺けて行く月がおそく海から上つて、波の上にさゝやか

な燐光を投げた。

○

トラファルガーの灣を遠望して、船はタリファ岬を近々と通つた。海に突き出た岩礁の木がくれに、四五百の人口を護つてゐるらしい一かたまりの家屋が見える。それは英語のタリフといふ語源となつたタリファの村だ。バイロンの海賊篇の中からでも脱け出て來たやうな海賊共が、無頼放恣な風俗をして、海上を行く商船を目がけて、隼のやうに小船を乘りつけて掠奪を擅まにしたあたりはこゝだ。赤い布の鉢巻き、寛濶なズボン、段だら染めの帶の間に半月なりに曲つた小刀をたばさんで、小船の舷頭に倚る彼等の姿が眼に見えるやうだ。

國家はこの海賊共のし殘したことを、もつと散文的に而して合法的に摸倣して、それが國際の通商には缺くべからざる制度となつた。それは戰國時代の偸盗が、偃武時代の大名となつたのとよく似てゐる。けれどもその色彩は何んといふ黝ずみかたをしたものだらう。

私の想像は更らに太古に溯つて、このあたりの海の上に、勇敢無敵な小船の群を描き出した。フェニシヤを船出して數十日、ブリトンの山に銅を、北海の岸に瑪瑙を探らうとする冒險比ひなき商隊の乘るところのものだ。それらの小船は、地中海の波おだやかな航海を終へて、金毛の裘を求むる希臘神話の船のやうに、巨利そのものよりも、夢の如き冒險の快味に誘はれつゝ、この外海の波濤に船を弄ばせてゐるのだ。或は又、大きな獨木舟を思はせるやうな細長い船の舷に、丸い楯をかけならべ、百足虫の足のやうに長い櫂を立て、毛皮と肉とで身づくろひした北方の海賊達が、サガの中の戰歌を海風に歌ひ合せながら、所在に恐怖を播きつゝ乘り廻したのもこの邊だらうか。

歐羅巴に來ると海も亦老いる。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com